

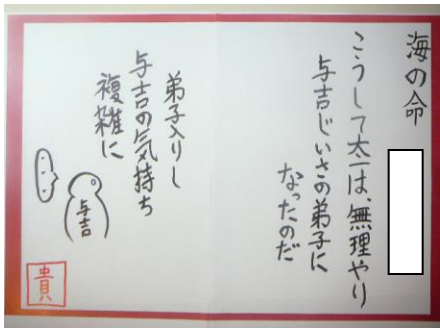
三学期の理想に向けて現状を把握するイメージ化を例に

岡 篤（兵庫）

イメージ化と学級経営

イメージ化は、私の学級経営の柱の一つです。この学習が進むことで、子どもたちが自信を持ち、友達の良さを理解し、自主的に活動していくようになることを目指しています。

私のイメージ化



私は、読解指導の中心を文章からどのようにイメージを広げることが出来るかに置いていきます。「行間を読む」という表現が近いかと思いません。

そして、単元

の終わりには、「お話五七五」（上の写真）

と呼んでいる、自分が最もイメージが広がった部分を視写し、イメージ化した内容を五七五にする活動を行っています。

理想の状態

私にとつての理想の展開とは次のようなこととなります。

- ① 一人一人が豊かにイメージを広げて文章を読むことができる。（全員がノートや黒板に書くことができる）

最初は、全員で同じ部分をイメージ化することで、学習の仕方や内容を確かめていきます。それを徐々に自主的な活動に広げていきます。次のようなステップとなります。

教師が指示した部分のイメージ化を行う

← 教師が指示した候補から自分でイメージ化する部分を選ぶ

← 自分でイメージ化する部分を探す

- ② クラスでイメージ化を交流することでより考えが深まる。（全員が生産的な話し合いに参加できる）

- ③ 自分にとつて、もっとも印象的な部分を選び、五七五に表現することで学習を振り返る。（全員がイメージを広げたお話五七五ができる）

イメージを広げた五七五とは、教材文を五七五に変えただけではなく、イメージ化したものを五七五にするということです。上の写真の場合、文章に直接書かれていない、与吉じいさの太一への思いを素材にしているので、イメージ化を広げた五七五と評価できます。

一方、イメージを広げられていない例と

しては、教材文の同じ部分を取り上げて、「太一はね予吉いさの弟子になる」といったものがあります。これは、教材文の言葉を五七五になおただけです。

さじ加減

お話五七五の前提として、俳句を暗誦することで五七五になじんでいる、五七五を作る経験をしているということがあります。

私は、俳句自体も重視しており、お話五七五の布石でもあるので、たいてい、一学期の間に、俳句の暗誦、俳句カルタ、俳句づくりまで子どもに経験させます。

六年生でも一年生でも同じです。もちろん、学年によりクラスにより「現状」はちがうので、暗誦のペース、俳句作りの指導などは当然、微妙に違ってきます。

これが、さじ加減であり、直接の指導者のみが可能なことです。

ある年度の例

低学年を担任したときのことです。この年のクラスは、基礎的なことが定着していない子がたくさんいました。

よくいえば子どもらしい、言い方を変えれば幼い子が多いクラスでした。計算、漢字はもとより、給食やそうじ、学習規律の指導にも手がかかりました。

少し難しいことをするとすぐにキレた状態になったり、全くやる気を失って何もなくなったりする子が何人もいたのです。そういった子たちに必要以上の負荷をかけることは得策とはいえません。

私は、俳句よりも計算、漢字、学習規律を優先すべきだと判断しました。

いつもなら一学期のうちに、俳句づくりを一回や二回は経験させておくのですが、この年は二学期に回しました。

そのため、お話五七五も一学期には行いませんでした。

視写のみ

ただし、視写のみはさせることにしました。お話五七五は、白い紙に視写をさせるので、行や字のバランスを取ることにも課題となります。

二学期に五七五と視写を同時に初めて取り組むのはこのクラスの多くの子にとって

はハードルが高過ぎると考えたからです。

視写、俳句カルタ、俳句づくり、と順番に経験を重ね、お話五七五への布石を打ち続けました。

そして、二学期の後半に、お話五七五にも取り組みました。そのときには、一学期に行った視写の作品を見せて、「これに五七五も書きます」と説明をしました。

最終的には

このクラスの場合、最後までスムーズに読解段階でのイメージ化ができない子がいました。私が、場所も指示して「ここでスーホはどういったと思う」色々例を挙げて尋ね、それをヒントにようやく、書き込みを行うという状態で終えました。

それでも、一学期のころは何も言わず、書くこともせず、だったので、進歩は見られたということです。

お話五七五も同じように個別指導でなんとか作品ができたという状態でした。それが実態なので、仕方ないと割り切っています。理想に向けて、一歩でも二歩でも着実に進むことが重要と考えています。